日语研究

第6辑

《日语研究》编委会 编

商務印書館

日语研究

第 6 辑

《日语研究》编委会 编

商務印書館
2008 年 · 北京

图书在版编目（CIP）数据

日语研究 第6辑/彭广陆等编. —北京：商务印书馆，2008
ISBN 978-7-100-06567-2

Ⅰ.日… Ⅱ.彭… Ⅲ.日语—研究—丛刊 Ⅳ.H36-55

中国版本图书馆CIP数据核字(2009)第018483号

所有权利保留。
未经许可，不得以任何方式使用。

RÌ YŬ YÁN JIŪ
日 语 研 究
第6辑
《日语研究》编委会 编

商 务 印 书 馆 出 版
（北京王府井大街36号 邮政编码 100710）
商 务 印 书 馆 发 行
北京瑞古冠中印刷厂印刷
ISBN 978-7-100-06567-2

2008年12月第1版 开本787×960 1/16
2008年12月北京第1次印刷 印张23¼
定价：39.00元

《日语研究》编辑会

主　　编　彭广陆（北京大学）
副 主 编　徐一平（北京日本学研究中心）
　　林　璋（福建师范大学）
主编助理　潘　钧（北京大学）

卷 首 语

《日语研究》第6辑与读者见面了。本辑共刊登特约论文1篇，投稿论文17篇，书评4篇。

特约论文《文法とコミュニケーションにおける知識と体験》是日本学者定延利之主持以及参与的共3个科研基金项目的阶段性研究成果。作者首先把对话中说话人传递的信息分为“知识”和“体验”，而后探讨了“知识”和“体验”在语言运用中造成的不同效果。譬如，我们都知道「?? 庭で木がある。」这样的存在句是不自然的，原因在于存在的处所用「で」格标记。但是在特定的情况下「で」格也可以标记存在的处所，如：「A：こういう4色ボールペンみたいなのは，日本にしかないでしょうね。B：4色ボールペン，北京でありましたよ。」答句的处所就是用「で」格来标记的。作者认为，前者是传达“知识”的，而后者是传达“体验”的。传达体验时，说话人说的是自己经历的“事情”，所以处所可以用「で」格标记。不仅如此，“知识”和“体验”的选用还关系到对话中说话方式是否郑重的问题。

本辑的投稿论文中，语法研究的论文居多。而且相对集中在名词修饰成分和语用学两个方面。于一乐的《「V＋ながらの＋NP」的成立条件与NP的共现规则》用词汇概念结构理论对Vendler（1967）的动词四分类进行描写，在此基础上探讨了「V＋ながらの＋NP」句式中V与NP的共现条件以及V与NP的换位规则，“证明了出现在该句式中的动词或名词绝大多数等于或相当于非作格动词（活动动词）和状态动词。「ながらの」句式的前项动词与后项名词中的施事相同，在词汇概念结构中都相当于x。”胡稹的《试论日语「格助辞＋ノ」的ノ》借用汉语研究中的谓词隐含的概念来解释日语中格助辞与ノ的重叠问题。黄成湘、张佩霞的《「格助词＋の」结构与连用格的对应关系考察——以「デノ」结构和「へノ」结构为中心》考察了「デノ」结构和「へノ」结构与「デ、へ」以及有相关语义的「ヲ、ニ」的对应关系，认

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

为「格助词＋の」结构中「ノ」前的格助词必须使用其原型义或原型义的一次扩展义。毕晓燕的《关于日语感情形容词作定语时的人称限制问题》则关注日语的感情形容词作定语时的人称限制问题，认为“在定语从句中，当感情形容词表示某个（某些）特定的人的感情时，人称限制仍然存在；当感情形容词不是表达某个（某些）特定的人的感情时，即感情持有者泛化时，感情形容词的人称限制消除。”

语用学研究方面，张惠芳的《关于日语“推量要求确认”表达形式「だろう」、「のではないか」、「ね」的考察》考察了日语中用于表达说话人的推测并要求对方确认的语言形式。作者借用安達太郎（1999）的句子结构图，将句子的意义分为“命题＋判断＋传达”，认为「のではないか」以及「ね」前面的「のではないか」和「だろう」属于“判断”，而在表达“传达”的意思时，「のではないか」由上升的语调来实现，「ね」以及「だろう」也都需要伴随上升的语调。杨久成的《日语否定型拒绝策略组合使用的语力变化规律》分析了“直接拒绝”、“（行为要求型言语行为）适切性否定”和“外在条件否定·预想结果否定”3种不同层次的否定拒绝策略组合使用时产生的语力变化。在结构上，“同层次拒绝策略组合使用多并列关系、跨层次拒绝策略组合使用多因果关系”，“并列式否定型拒绝策略的组合使用加强拒绝语力”而“因果式否定型拒绝策略的组合使用中和拒绝语力”。陈臻渝的《论表示歉意的前置表达用法之区分——依据后续信息内容的分类》从“要求行为”，“实施行为”，“要求信息”，“传递信息”4种角度，对日语中表示歉意的前置表达式「悪いけど」，「すみませんが」，「申し訳ありませんが」，「恐縮ですが」，「失礼ですが」的用法做了描写。马燕菁的《言语交际中接续语「ところが」的认知语用研究》运用关联性理论分析了「ところが」的“意外感”的产生机制和听话人所获意外感的两个层面。李旖旎的《日语笑话的认知语用推理——关联性理论分析》利用关联性理论分析了日语笑话中的逗笑机制。另外，毋育新的《从“礼貌原则”、“礼貌策略”到“话语礼貌理论”——40年来礼貌现象研究的回顾与展望》介绍了英语界、日语界和汉语界礼貌现象研究的历史，并展望该研究的未来走向。

本辑的语法研究还有其他一些话题，戴宝玉的《语法化与日语的复合助

辞研究》在回顾了日语复合助辞研究的历史后，主张可以从语法化的角度来研究日语复合助辞和非复合助辞。贾黎黎的《试议量与肯定极项的关系》对“语义程度极小的词语只能用于否定，语义程度极大的词语只能用于肯定”这一“公理”提出质疑，认为“不仅仅是语义程度极大（量大）的词语，只要含有一定程度语义（定量）的词语便难以进入否定结构。”刘健《试论日语中的「～中（チュウ）」》考察了「～中（チュウ）」和体标记「～テイル」的对应关系，发现在与「～テイル」不对应的用法中，有的需要添加动词，有的则需要进行使动态或被动态的转换，而「～中（チュウ）」所表达的意义仅限于“动作的持续”和“变化结果的持续”。时江涛《论「動名詞」与接尾词「－中」的结合关系》参照 Vendler（1967）的分类，考察了汉语音读词「動名詞」与「－中」的结合状况，认为「動名詞」要与「－中」结合，其词汇意义表示的不论是“过程”、“结果状态”还是“状态”，必须具备“可限定时间幅度”，包括表示存在义的「動名詞」。

李耀的《谈谈日汉辞典释义中的一些误错与不足》以大量的证据指出了《日汉大辞典》在处理对应译词时的一些错误，向我们展示了双语辞典在处理译名时所需要的论证程序。

在教学研究方面，何环、周浩的《日语专业学生对数量词读音习得的实证性研究》对一、三两个年级的日语专业学生对数量词读音的掌握情况做了调查分析。张慧霞的《试论日语专业日语教学的属性》借鉴我国英语教学研究的成果，首先介绍了母语、第二语言和外语的概念，然后区分了“作为国语的日语教学”、“作为继承语的日语教学”、“作为第二语言的日语教学”和“作为外语的日语教”，认为日语专业的日语教学最主要的目标是“作为智力发展和培养，或作为自我完善过程的一部分”。

本辑刊登了 4 篇书评，评介对象涉及语言对比研究、现代日语语法学研究、日本传统的国语学大师时枝诚记的语法观研究和辞书研究。这些专著和书评作者是：朴贞姬著《日朝汉三语语言结构——空间表达方式对比研究》（徐一平），刘笑明著《日语语法学研究新解》（朱鹏霄），许宗华著《意向性理论与语言过程说——时枝语法解析》（吴侃），潘钧著《日本辞书研究》（邱根成）。

我们注意到，本辑的一些论文在研究日语问题的时候积极借鉴汉语界以及英语界的研究方法和成果，这是一个可喜的现象。这种横向联系的视野是值得提倡的。同时，我们还有必要关注在引进时的“消化”，寻找更适合研究对象和研究目的的论证方法。

《日语研究》编委会

目　　录

卷首语 ……《日语研究》编委会(1)

特约论文

文法とコミュニケーションにおける知識と体験 …… 定延利之(1)

论　文

语法化与日语的复合助辞研究 …… 戴宝玉(15)
关于日语“推量要求确认”表达形式「だろう」、「のではないか」、
「ね」的考察——从信息传达和语用学角度 …… 张惠芳(28)
试议量与肯定极项的关系 …… 贾黎黎(45)
「V＋ながらの＋NP」的成立条件与 NP 的共现规则 …… 于一乐(64)
试论日语「格助辞＋ノ」的ノ …… 胡　稹(86)
「格助词＋の」结构与连用格的对应关系考察
——以「デノ」结构和「へノ」结构为中心 … 黄成湘　张佩霞(103)
试论日语中的「～中（チュウ）」 …… 刘　健(123)
论「動名詞」与接尾词「-中」的结合关系 …… 时江涛(145)
关于日语感情形容词作定语时的人称限制问题 …… 毕晓燕(161)
从“礼貌原则”、“礼貌策略”到“话语礼貌理论”
——40 年来礼貌现象研究的回顾与展望 …… 毋育新(174)
日语否定型拒绝策略组合使用的语力变化规律 …… 杨久成(190)
论表示歉意的前置表达用法之区分
——依据后续信息内容的分类 …… 陈臻渝(208)
言语交际中接续语「ところが」的认知语用研究 …… 马燕菁(224)

日语笑话的认知语用推理
——关联性理论分析 …… 李旖旎(239)
谈谈日汉辞典释义中的一些误错与不足 …… 李 耀(262)
日语专业学生对数量词读音习得的实证性研究 ……
…… 何 环 周 浩(285)
试论日语专业日语教学的属性 …… 张慧霞(297)

书 评

评朴贞姬著《日朝汉三语语言结构——空间表达方式对比研究》 ……
…… 徐一平(311)
评刘笑明著《日语语法学研究新解》…… 朱鹏霄(319)
评许宗华著《意向性理论与语言过程说——时枝语法解析》 ……
…… 吴 侃(328)
评潘钧著《日本辞书研究》 …… 邱根成(335)

编者后记 …… (344)
来稿注意事项…… (345)
英文目录 …… (348)
《日语研究》以往各辑目录 …… (351)

文法とコミュニケーションにおける知識と体験

定延利之（神户大学）

提要　本文拟对笔者近年来“语法——交际”研究中关于“知识”与“体验”的部分加以简要的概括。具体内容可归纳为以下三点：

第一点：我们通常坚信日常的交际是“知识的相互传递”。

第二点：然而知识和体验表现在语法上是不同的。至少在语法研究中有必要将二者区分开来考虑。

第三点：知识和体验作为交际行为也是不同的。也就是说，在进行交际研究时有必要将二者区分开来考虑。说得更具体一点的话，就是知识是可以传达的，而体验是不可传达的。体验是在对方面前的种种表现。我们的交际基本上不是知识的相互传达，而是在对方面前的表现出的体验。

キーワード　知識，体験，文法，コミュニケーション行動

1. はじめに

本稿では，ここ数年間の筆者の文法～コミュニケーション研究のうち，特に「知識」と「体験」に関する部分を，わかりやすく提示したい。具体的な主張は以下3点である。

第1点。われわれは日々のコミュニケーションを，どこまでも「知識の伝え合い」と考えている。

第2点。だが実は，知識と体験は文法が異なる。つまり，少なくとも文法研究においては，両者は別物と考える必要がある。

第3点。知識と体験は，コミュニケーション行動としても異なる。つ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

まり,コミュニケーション研究においても両者は別物として考える必要がある。より具体的に言えば,知識は伝えるものだが,体験は伝えるものではない。体験は,相手の前でやってみせることである。われわれのコミュニケーションは基本的に,知識の伝え合いというよりも,相手の前で体験してみせることである。

以下,1点ずつ順に論じる。

2.「コミュニケーション＝知識の伝え合い」という通念

たとえば次の図1のような,渋面で向かい合った2人の人物XとYの絵を大学生に見せ,この2人の間の対話を自由に書き出させてみると,

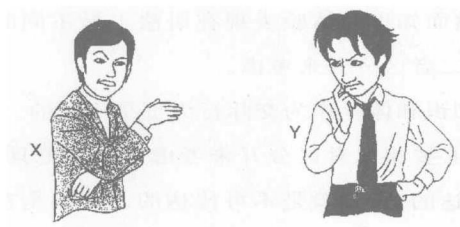

図1:渋面で向かい合った2人の人間の絵の例

よく出てくるのは(1)のような仲の悪い,つまり非協調的対話である。(2)のような仲の良い,協調的な対話はまず出てこない。

(1) X:あれは絶対イタチだって!
　　Y:いや,ネズミですよ!

(2) X:それで皮膚に跡が残っちゃって。
　　Y:その薬,偽物じゃないんですか。

同様に,次の図2のような,片方だけが渋面のXとYの絵を大学生に見せ,X－Y間の対話を書き出させても,大学生が作り上げるのはたいてい(3)のような,無神経なXにYが腹を立てるといった非協調的な対話であり,(4)のような協調的な対話はほとんど出て来ない。

図 2:片方（Y）だけが渋面の2 人の人間の絵の例

(3) X:今日はもうこれで帰らせてもらいますよ。

Y:いい加減にしろ!

(4) X:もう今ではいい思い出ですけどね。

Y:でも苦しかったでしょうねえ。

これらのことは何を意味しているのだろうか?

対話(1)でXとYは,「われわれを取り巻く世界はどのようなものであるか?」という問題の一種である「あの動物は何という動物なのか?」という問題に関して,保有する知識（「あの動物はイタチである」「あの動物はネズミである」）が両立しないので決着を付けようとしている。同様に対話(3)でも,XとYは,「われわれは世界に対してどう働きかけるべきか?」という問題の一種である「今日 Xがこれで帰ることをYが認めるべきかどうか?」という問題について,対立する知識（「認めるべき」「認められない」）を戦わせている。つまり大学生が想像しがちなコミュニケーションとは,「われわれを取り巻く世界はどのようなものであるか」あるいは「われわれは世界に対してどう働きかけるべきか」という問題に関して,保有する知識を相手に伝え,時に相手と保有知識の優劣を競う（その場合には表情が険しくなる）コミュニケーションである。これはひとことで言えば、「知識の伝え合い」というコミュニケーションである。「知識の伝え合い」は,人々がよりよい知識を身につける上で必要なものである。

これとは対照的に,大学生が忘れがちなのは,体験談型のコミュニケーションである。(2)でも(4)でも,Xは過去の苦しい体験を語っており,Yがそれに共感している。体験者であるXは,自身の苦しい体験を「吹っ

切って」語ることもでき，その場合は苦しい渋面にはならないが（図2），共感者であるYは相手Xの苦しい体験に共感するために基本的に渋面である。「まあ，長い目で見ればこれもいい体験でしょうね」などと笑顔で言うことはふつうない。（劣位者の苦労話に対して，優位者がわざととりあわず，「そんな苦労はまだまだスケールが小さいよ。苦労のうちに入らない」などと反応する場合は例外である。）

しかし，(2)(4)のような，渋面有りの協調的対話を大学生たちがやっていないかというと，そうではない。たとえば次の図3は，大学生どうしのなごやかな会話の一断片だが，ここでは食中毒の体験談を笑顔でおこなう男子学生に対して（図5），女子学生が眉間にしわを寄せ，りきみ声で「はぁー，はぁー，大変ねー」と共感している（図4）。つまり図2と同じ図式である。だが，この2人には非協調的なところは特に見られない。

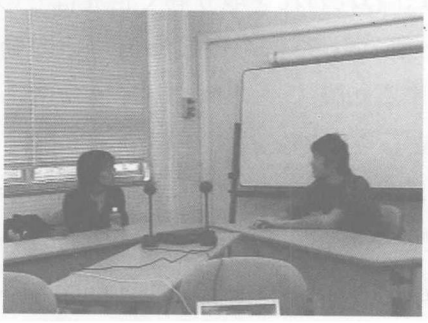

図3：大学生どうしの対話の一断片

図4：共感する女子学生

図5：食中毒の体験談を語る男子学生

大学生だけではない。「もっと聞き取りやすいように,よどみなく,大きな声でハキハキしゃべりましょう」「この話にテーマをつけてみよう」「内容に応じて,この文章を前後2つに分けましょう」「要点を箇条書きにせよ」「君の話はトップダウンになってないからわからない」等々,われわれが幼少時代から社員研修に至るまで訓練されるのは,迅速で円滑な「知識の伝え合い」を可能とするコミュニケーションの技法だが,われわれの多くはいくら訓練されてもこれらが決して得意ではない。ということは,われわれが日常やすやすとおこなっているコミュニケーションは,「知識の伝え合い」とは異なる別物だということになりそうだが,われわれはこのことには気づかずにいる（定延 2007b)。

3. 知識の文法と体験の文法

知識と体験は実は文法が異なっている（定延 2002a, 2008)。つまり,少なくとも文法研究においては別物と考える必要がある。以下,紙面の都合で,このことを示す現象を1つだけ挙げる。それは,場所の格助詞「に」と「で」に関するものである（定延 2004)。

日本語には場所の格助詞として「に」と「で」があり,両者は非常に単純な規則によって使い分けられている。たとえば(5)〜(8)を見られたい。

(5) 庭に木がある。　　(7) ?? 庭にパーティがある。

(6) ?? 庭で木がある。　　(8) 庭でパーティがある。

(5)が自然で(6)が不自然であるように,モノ（木）の存在場所（庭）は,「で」ではなく,「に」で示される。これとは対照的に,(7)が不自然で(8)が自然であるように,デキゴト（パーティ）の存在場所（庭）は,「に」ではなく「で」で示される。以上のことは以前から広く知られていたことだが,ここで重要なことは,(6)が不自然だということである。つまり,モノ（木）の存在状態「木がある」はただの状態であって,デキゴトではない。もしも「木がある」というデキゴトが庭において成立している,と考えられるなら,「庭」には「で」が続いてもよく,(6)は自然になるはずだが,現実には(6)は不自然である。

ところが,このような文法は実は「知識の文法」でしかなく,「体験の文法」はそれとは違った性質を持っている。たとえば(9)を見られたい。

(9) A:こういう4色ボールペンみたいなのは,日本にしかないでしょうね。

B:4色ボールペン,北京でありましたよ。

(9)のBの発言は,北京におけるモノ(4色ボールペン)の存在を述べるものだが,「北京」直後には「で」が続いている。このような発言を行えそうな人物として思い浮かべられやすいのは,北京の観光旅行から日本に帰ってきたばかりの人,つまり北京におけるモノ(4色ボールペン)の存在を,知識としてではなく,体験談として語りやすい人物である。このように,体験談では,モノの存在状態はただの状態ではなく,デキゴトでもある。

では,それはなぜだろうか? なぜ体験談の場合は,モノの存在状態がデキゴトになり,(9)は自然なのか? 筆者の解答をごく手短に言えば次のようになる。

そもそもわれわれの人生は,一瞬一瞬のデキゴトの連続である。一瞬一瞬の状態は,そのままではただの状態にすぎないが,我々がその状態を生きることによって,つまり人生の中で体験することによってデキゴトになる。我々が状態を生きている時,4色ボールペンが存在している場所とは,我々の目の前である。[4色ボールペンが自分の目の前に存在している]という状態とは,ただの状態ではなく,[自分はいま4色ボールペンを目の前にしている]という,人生の中の一つのデキゴトでもある。そのデキゴトが北京において生じたということなので,「北京」に「で」が後接することに不自然さはない。

ここで述べたことは,体験談は知識表現とは文法がはっきり違う(状態がデキゴトになる)ということ,そして,この違いは,体験はわれわれ一人一人がそれぞれ生きていることに根ざしているということである。

4. 伝えるものではなく，相手の前でやってみせること

コミュニケーション行動のレベルにおいても，体験は知識とは大きく異なる（定延 2007a）。以下このことを，仮に「義務」と「権利」という発話の2つの側面から論じたい。

4.1. 義務（相手の前でやってみせなければならないこと）について

まず，次の会話断片を見てみよう（Sadanobu 2004；定延 2005）。

(10) 男：「なんでや」と。「お前そんなはっきり言うたらな，お客さん気い悪するやないかい」言うたら，「無いものは無いでしょう」と。「なんぼ努力しても無いものは無いんです。だから，お客さんに，早くあきらめてもらって，次善の策を練ってもらうのが一番親切でしょう」と言うねん，専務はな。ところが常務は大阪人や。違うねん。「いやーそらむつかしいでしょうなー。せやけど一所懸命，これからがんばってみます。思い切りがんばって，その時は，あのーなかった時は，すんませんがーまーちょっと許してくださいよー」とこう言いよるわけや。

女：うん。

男：へやけどほんとに努力しよらへんねん（笑）。

(10)は2人の人間の対話を録ったものだが，ここでは男性話者がほぼ独占的に話をしている。男性が話しているのは，自分が知っている旅行代理店は，（東京人の）専務と，大阪人の常務で，客への対応が違う，ということである。「何月何日のどこそこ行きの飛行機のチケット，今からとれるか?」と，客から無理な依頼を受けた時に，専務はすぐに「とれません」と答えると言う。それを話し手の男性がいぶかしみ，「なぜだ。そんなにはっきり『とれません』と言ったら，お客が気を悪くするのではないか」と問うてみた，というところから会話は始まっている。専務の返事は，「すぐはっきり断ることこそが丁寧な対応だ。なぜなら，客の時間は大切なものだからだ。できもしないことを引き受けて結局『できませんでした』と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com